2011.1.19

# 「知識、考えること」ことと私

日本語教育研究科修士２年

N.Y

目次

１．興味関心はどこにあるか

２．「知識」とは何かを発見するために

　２−１．知識の捉えかたを探る

　２−２．話をしていて満足感を感じるとき

　２−３．「知識」が人を結び、「知識」がことばを作る？

３．授業でもらったコメント

　３−１．as is to be

　３−２．　発想の転換

４．B さんとの対話で、わかったこと

　４−１．感情にコミットしていた背景

　４−２．他者との関わり方

５．対話では何をしているか

６．結論

終わりに

１．この活動の意味

２．ことばの市民になるとは

## １．興味関心はどこにあるか

　日々の暮らしの中で、授業、本、雑誌、友達との会話など様々な場所で様々な情報に触れている。私はこれまで、たくさん情報を取り込んできたにもかかわらず、それが生かせていないと感じることが多かった。その場では理解したと思っているのに、いざ別の場所で関連する話がでても一番大切な所を覚えていなかったり、核心的な所を理解していないことから知っているのにうまく伝えられないということを多々経験してきた。その度に、そんな自分が嫌になり、もっとしっかり物事を捉えたいという気持ちになった。元々、人と話すことが好きなのにこのような経験をすることで、

どのように関わっていけばよいかわからなくなるのだ。話す事が好きなのに、言いたいことがまたもうまく伝えられなかったという経験をする。このような経験を繰り返すうちに根本的な所で自分を肯定的に捉えられなくなってしまう。

では一体、「知識」とはなんなのだろうか。私は、「知識」が生きる上で人が人と関係を結んでいく時に重要な役割りを果たすと考えている。しかし、「知識」が一体なんであるのかをきちんと咀嚼できずにいる。私は知識を情報とは捉えたくない。一般的に知識が情報として捉えられていることに疑問を覚えている。知識は他者の考えや自分の考えのやり取りの中から生まれてくるものであり、決して自分１人で作れるものではないはずであると考える。どのようにしたら、他者の中で生きる自分が、考え、そこから知識にしていけるのかを模索し続けたい。知識の糧にするためにも色々なことに挑戦し、失敗し、考え、自分で体験して深めていくことが大事なのだと思う。

私が「知識」に関して興味を持っていることに気がついたのはグループ内での話し合いからである。私は当初、「『知っている』とは何か」ということに対して、自分が今までどのように考えてきたのかを振り返っていた。そこでわかったことは、私が実際に理想としている「知っている」という状態と、他者を評価する時に感じる「知っている」には差が生じているということ、そしてそれは、私が育ってきた家庭環境等が影響しているのではないかということもわかった。しかし、私は、なぜそこまで「知識」に興味を抱くのだろうか。その答えを見つけるために、対話活動を行いその対話活動の中から改めて「知識」と向き合うことにした。少しでも自分の中で「知識」に決着をつけ、今後日本語教師としてことばに関わる仕事をするさいの私の布石にしていきたい。

ここまでが、グループ以外の人と対話をするまでに授業を通して知識とはなにかを中心に考え、発見したことである。以下は、この考えをもって、グループ以外の人と対話を提示する。最後に、対話をしたことで、私は「知識」に対してどのような考えをもったのか、この対話活動は私にとってどのような意味があったのか、そして興味関心と自分との関係を明確にしていくというこの活動はどういう意味があるのかを述べることとする。

## ２．「知識」とは何かを発見するために

対話の相手は、大学生のＢさんである。Ｂさんとはある授業を通して知り合いになった。Ｂさんは、お子さんを育てながら大学に通っている。Ｂ さんと私は同じ学生という共通点を持っているが、それ以外にはあまり共通項はないかもしれない。私にはない意思の強さや、主張、思いというものをＢさんと話しているととても感じるのである。Ｂさんとゆっくり話してみたいと思った。

## 2−1．知識の捉えかたを探る

まず、私はBさんが知識をどのように捉えているのかを探りたく、直球で質問を投げかけてみた。そしたらBさんからは、*「彼と話すと知識の応酬戦になる」*というフレーズが出た。この時のBさんの知識のイメージは情報であり、私が初めに述べた性質をもつものではないという。情報のやり取りのみで、そこには話し手の感情が余伝わってこない。つまり、知識ということばこそ使っているものの、中身の性質は情報なのである。そしてこの際Bさんが使う知識（情報）はポジティブなものとしては捉えておらず、ネガティブなものとして使用するそうである。さらに、B さんが考える知識は、固定的なものではなく話す相手との関係性や、場面によってその表出量に変化が生じるというのである。

> **知識は、きちんと頭の中に入ってないから、人と話す時にでてこないのではなくて話す相手との関係性や場面によって、その情報がロックされたり解除されたりする。話している時に自己肯定感があると、少ない知識でもなんでこんなにたくさん話せるんだろうと思うほど、話せると気がある。そして、体調が悪かったり、相手との関係によって本当に些細なミスをしたりすることがある。**

この意見には私も賛成である。しかし、私はまだ知識が捉えられずにいた。どのような状態になったら私は知識を獲得したと感じられるのか、自分の「知識」にするためにどのようにしたら良いかわからずにいた。そこで、「外の情報を取り込んだ際、ただ自分のなかに取り込むのではなくそこで「考える」というプロセスを踏まなければ、自分のものにならないのではないか」という疑問を投げかけた。それに対し、Bさんは、「でも逆に、考えるとできなくなってしまうこともある。考えすぎて行動に移せないこと。考えているうちに、こんな難しいことじゃないはず。と思うことがある」とBさんは述べた。私は、考えるということが全て自分のためになると思っていた。なので、考えないほうが行動しやすいこともあるというBさんの考えに対して頭では理解できても、知識を解明することには繋がらないのではないかと考えた。

## 2−2．話をしていて満足感を感じるとき

私は、対話をするまえに知識をもって人と関わることが自分を満足させるものだという前提で対話を始めたが、もしかしてBさんは違うかもしれないという思いがよぎった。そのため、Bさんが話をしていて満足する時はどのようなときかを聞いてみることとした。

まずBさんは、一番最初の例文のように知識をネガティブなものとして捉え、「知識の応酬戦」をしている会話に一番不満を覚えるそうである。B さんにとって、常識がない人は好きではないが、一般常識しか話さないひとはもっと嫌いだという。これは、満足感にもつながるのだが、逆にBさんが会話をしている時に満足をえるときは、常識を取っ払い、話し相手の感情や気持ちがわかるときだそうだ。B さんにとって、人と話をする時に一番重要なのは知識や常識ではなく相手の気持ちであるということが伝わってきた。

私はBさんの発話を受けて、人と話す時に感覚で話してしまう自分が嫌であるが、自分の言葉で、自分の気持ちを伝えられているとき、私は満足していると答えた。だとすると、私が本当に興味をもっていることは「知識」そのものではなく人とどのように言葉で関わるかということになる。「知識」とは何かが知りたいのではないのかも知れないと、話をしながら考えていた。

### 2-3.「知識」が人を結び、「知識」がことばを作る？

対話を終えて、私は次のようなことに気がついた。私が初めに述べていた知識の議論からだいぶずれてきているということである。なぜなら、私は対話を通して改めて考え、考えたことをまた B さんと対話しているこのではないかと思ったからである。対話をすることでまた気づきが生まれ、これを繰り返していたのである。そして、そこで生まれたものは私を作り上げ、私とBさんを結ぶ接着剤となるように感じた。そう考えると、私が知りたい知識には一体なにが詰まっているのだろうか。そのような疑問を授業でグループに投げかけてみた。

## 3．授業でもらったコメント

### 3-1. as is to be

「as is to be」とは、今の自分と将来の自分をという意味である。この意見をもらって、私がこれまでレポートに掲げてきたものは私が理想としている「to be」の部分だけを記述していた。つまり、「知識」という外枠にばかりにこだわっていたのである。その人から発せられる結果物が全てだと思い、そこから出てくる情報を私が得ればその人のいい所だけを獲得できるような気になっていたのかもしれない。それを受けて一人一人がどうするのか、また私はどうするのかというところが重要であると考える。しかし、そんなに簡単にかわれるのだろうかという疑問もある。

### 3-2.　発想の転換

私は、Bさんともう一度対話の続きを行いたいと思っていた。そして、授業の前に対話を行った。

対話をしたものの私の中ではまだ知識がなんであるのか、もやもやとしていた。それをグループのメンバーに相談したところ次の２点をアドバイスとしてもらった。①このレポートで一番大切なポイントはどこなのか②知識という言葉ではなく、B さんからの情報が B さんに対する知識になるのではないか、の２点である。①は私自身もレポートを読み返してまだ揺れていた部分である。②の視点は、わたしにとってハッとさせられるものだった。なぜなら、対話をした１回目も私は、B さんから出される情報のなかで「知識」というものが何であるのかを解明しようとしていたからである。発せられた言葉だけを取り込みそこから自分なりの「知識」を明確にしようとしていたのである。そうであると、別に対話相手はB さんでなくてもよくなってしまう。誰が言ったのか、その言った「誰」かと私はどのような関係を結ぶのかそこを考える必要があったのである。

## ４．B さんとの対話で、わかったこと

ここでは、B さんの感情に対する考えを抜き出しそこから知識について考えてみることとする。

### ４−１．　感情にコミットしていた背景

B さんは、進学したら、情意面に焦点を当てた研究を行っていきたいと述べていた。前回の対話でも、B さんは他者と対話をする中で、一番大切にしていることが感情のやり取りだと答えていた。なぜ、感情を大切にするのかが気になった。そして、もっと聞いてみたいとも思った。この対話では、B さん自身の事をすこし理解したとともに、理解するプロセスについても学んだ。下記に、B さんの発言を私の学びを記す。

> 結局なんやかんやいって、人間てねすごい単純な所から発してるんだと思う。自分がそれを好きかどうか、うん、楽しいかどうか、嬉しいかどうか、それをやってほっとするかどうか、その人といてほっとするかどうかそうやってどんどんどんどん人は人に感情をぶつけて、それで跳ね返ってきたもので自分を確認したり、そうやってどんどん自分のことをアイデンティファイしていくんだと思う。

> うん。そうね、だから今Ｙさん(筆者)がいったことで言えば、確かに私は前も言ったかもしれないけどもうそれこそ知識の応酬戦、情報の応酬戦だけの人間関係にはうんーざりしてる。うん。でそれは、裏を返すと、今Ｙさんが言ったみたいにやっぱりそこにはあるていど、自分に取ってそれがどんだけおもしろいのかとか、逆にどんだけこれをみたら悲しいのかとかっていう自発的な感情見たいのが絡んでこないとなかなか情報だ

けのやり取りをしてもその人を知ったことにもならなければ自分がわかってもらえたとか、伝わったっていう満足感を得ることにはならないですよね。って思うのが私の基本的な生き方なんだと思うんですよね。

３歳の時にふつーに家族と居間で遊んでたの。それこそタご飯のあとこうね、フニャーっとみんながなる時に、そしたらいきなり私、すごい泣いたの。声を出して。（中略）そのときたまたまいたじいちゃんばあちゃんが、どーしたのって、なにがあった、どこか打った、切ったってゆったんです。そしたら人間てどうして死ぬの―死んだらどうなるの、どこへ行くの、誰と会える、だれとあえなくなる死ぬって悲しい、人間て怖いよーって泣き出した。もう自分でもなにをゆったかを覚えてるし、であるいみそのすごい感性的だよね。

B さんが、感情にコミットする背景は、こういった小さ頃の出来事やこれまでの自分を認識する過程が強く影響しているのではないかとこれらの話をきいて考えるようになった。そこにB さんが向き合いながら成長したことが今のB さんを作っている。B さんの発言を丸ごと捉えてからではないと、B さんという人を理解できないのではないかと考えるようになった。つまり、こちらからの一方的な投げかけによってかえってくるB さんの答えは、切り取られたものであり、背景を理解せずにそこだけで全てを判断することはできない。私は、これらの発言が出てきたとき、とても不思議な気持ちであった。なぜなら、私は感情に対する質問はしていないからである。小さい頃どのような子どもであったのかなど、一見感情とは遠い感じる質問をした。しかし、そこに出てきた答えは、私が知りたかったB さんの背景の部分であった。その中に、B さんが感情にコミットする背景がたくさんちりばめられていたのである。

### ４−２．他者との関わり方

知識をどのように構築していくかを見るために、私は、B さんがどのように周りの人と関係を結んできたのかを聞いてみたかった。それは、この対話の趣旨でもあったが、個人的に気になったからである。自分の感情に向き合いながら成長したB さんは、今にいたるまでに、どのように他者と関わってきたのかを以下の発言からみていくこととする。

どこまでやんちゃになれて、どこまですれば人はどんな判断をするんだろうとか。うー

ん。ある意味で本当全力投球だったよね。そーゆーことを解明するために。だって、納得したいじゃない、自分に。（中略）たとえばそーゆー領域の人を知りたいなと思っても自分を破壊しない程度に、ざっとね見て回って、ちょっとコミュニケーションしてみてわかったつもりに慣れる人だったらそれはある意味で賢いなと思う。いいことだと思う、それもね。うん。だけども、私って言う人間がそこじゃ納得しなかった人間なんだと思うの。すごく偽善的に思えて、なんつうか自分の体とか心を砕いたりせずに、小手先だけでなんか人に対してしてみて、それで全てをわかった気持ちになれるひとはとても冒涜的で浅はかだなっておもって。

それは自分を表現したからとかじゃなしに、やっぱりなんかその妙な潔癖感ていうか責任感みたいなものがもともと組み込まれてるんだと思う。なんか、人に対して中途半端に心から想いもしないのにそうゆう態度を取り続けたりとか、なんか中途半端な所で人と関係を結んでいるって言う所が多分自分に取って、さっきからなんどもいうけど冒涜的みたいな。人そのものに冒涜的だというような価値観がきっと刷り込まれてて。うん、だからあえてここでなんとか表面上うまく行かなくなるだろうと思ってもあえてゆっちゃうときがある。

この対話から、B さんがこれまでどのように人と関係を結んできたかが伺える。私は、この発言を聞いたとき、B さんはとても自分を大切にしていると感じた。自分に正直であるから、人にも正直でいられる。気持ちときちんと向き合う姿勢があるから、相手の気持ちをとても推し量ってくれるのだと思う。そう強く思うエピソードがある。実は、この対話をした日、少し寒く雨が降っていた。ちょっとした連絡の行き違いから、私は少し外で待つことになったのだが、そのときの電話で B さんが一番に声をかけてくれた言葉が「ごめんね一寒かったでしょ」という私を気遣う言葉であった。どんな理由があって連絡が行き違っていたとしても、私はこの一言が B さんをものすごく物語っていると対話をする前から感じていた。

私は、B さんを対話相手とに選んだ理由は、主張や意思がはっきりしているからであった。自分の考えがはっきりしているから、自分のことをわかっているから主張や意思がはっきりしているのではなく、B さんは自分に正直に向き合って人に関わるという姿勢があるからこそ、私の目には主張や意思がはっきり写ったのだと思った。意見をきちんと言えるのは、情報をたくさんもっているからでも、知識をたくさん獲得したからでもなく自分はどのように生きたいのかという姿勢が根底

に必要なのかもしれないと思う対話であった。

## ５．対話では何をしているか

最後に、私はこの２回の対話を終えて改めて「対話」という行為を振り返ってみたいと思う。ここで示すＢさんとのやりとりは、私が共感したこと、私の性格とは違うと感じた２種類である。対話をすることと、私が今回テーマに掲げた知識や考えるということはどのような繋がりがあるのだろうか。まずは、私も同じような感覚をもっているなと感じた発言からみていくこととする。

> **高校がすごく地元から離れてる所で、通えないと。だからね、あたし高校生のときから一人暮らししたんですよ。自炊してて。うーん、自分にもすごい厳しかったし、負けたくないとかっていう気持ちもすごくあったんで、例えば高校１年なのに絶対外食はしない。ちゃんと自分で自炊ができること。とかいって勝手に課すんです、自分に。**

意思の強さは、ここまでないと思うが私は他者と関わる時に、勝手に他者がなにを求めているのか、どんな事をしたら喜ぶのか、を想像し自分自身を縛っていくというところが私にもある。しかし、私の特徴はそのうちに、本当はどうしたらよいのかわからなくなってしまうのである。相手が物事を決めているわけではないが、想像の中で自分の行動を決定していることは、「自分で決めた」という決定を避けることになる。いつのまにか、私は自分で決める責任を恐れるようになってしまっているかもしれないとふと思った。

全く違う境遇で育った私であるが、そのなかでも、考え方や生き方が似ている所がある。気がつかないうちに、対話活動の中でＢさんと似ているとか、ここは違うとか比較しながら聞いていることに気がつく。比較し、似ている所は共感になり、違う所は意見をさらに聞くきっかけとなる。そのようなやり取りが、Ｂ さんをさらに知っていくことになる。上記の内容が共有できる部分とするならば、以下のＢさんの発言は私とＢさんとで真逆の部分である。

> **自分を強烈にわかってもらいたいと思うことなかったですか。たとえばその恋愛でもいいんですけど、私、恋愛なんてそれの最たるもんなんだろうなって。人間関係、いろんな人間関係のジャンルの中で恋愛とかってそれの最たるもんだろうなって思ってたんですけど。（中略）世の中はどうでもいいと。常識もどうでもいい。いまのこの私、この瞬間にこんだけもあがってしまった自分のこの許せない度それがすべてみたいにな**

**るんだよ。だから、あんまり考えてどうこうじゃなくって、その場はまぁ、極端な言い方よ、私が法律。私をむかつかせたことが悪い。**

今でも、私はもっと感情的に自分が今このように感じたからこうする！という生き方で他者と関わりたいと思うことがある。自分１人のために下す決断ならば思いのままに行動するときもあるのだが、私はこれからも考えながら人と関係を結んでいくことになるだろう。なぜなら、B さんの意見を聞いても「どうしたら感情的に生きられるんだろう」とそこで既に考えてしまったからである。きっと、このように思考を巡らせてしまうこと自体「感情的に生きる」にはほど遠いのだと思う。

対話をしているとき、わたしはB さんと自分を比べている。これまでは、比べた時に、相手と違う自分は受け入れることができなかった。予め自分の意見をもって、対話に挑んだとしても、話の中で発展すると私は全ての考えに答えをもっているわけではない。これまでは、それが不安で「知識」をもっていることが大切であると感じていたし、皆今もっている知識をつかってことばのやり取りをしているのだと考えていた。しかし、今回授業を通して、対話の最中に人々はみな考えそこから目の前にいる人との関係を気付いているのだということを感じた。私は、これまで知識を獲得したいとおもっていた知識は、単なる情報をたくさん持ちたいということでしかなかったのかもしれない。そして、その情報をうまくパズルのように組み合わせたら形式としての知識という枠が出来上がると考えていたのだろう。さらには、その知識には人から評価されるものとされないものというどこかに正しいとされる知識があると考えていた。そうではなく、私は今目の前にいる人間の発言に対してどう感じ、なにがわからないのかをもっとぶつけてよいのだということを学んだ。衝突や、誤解を招かないためにことばを使うのではなく、衝突や、誤解があったとしてもそのときにきちんと自分を表していける言葉をもつことのほうがよっぽど重要であるということを学んだ。今までの自分のスタイルとは違う形で、対話という活動を行ってはじめて感じることができた体験である。

## ６．結論

私は、初め「「知識」は人間を深めるものだと考えている」と述べた。しかし、今は初めのときとは少し理解が違う。知識が人を深めるものであったら、やはり知識はどこかから手に入れて持っていないと人は深い人間にならないということになる。当初は、私以外の人は皆「知識」というアイテムをもっていてそれをやりとりしていると考えていたが人は初めから知識を持っていないのではないかと思う。知識という言葉を使っていながら、ここでは情報という意味合いがまだまだ強かっ

た。しかし、人は相手が求める答えを全て持っていないからこそ人と対話をするなかで情報をやりとりして、比較したり、考えたり、取捨選択するのである。そして、そこから自分を構築し、構築された自分がまた言葉をつかって相手へと投げかけることができるのである。にもかかわらず、当初の私はとても抽象化された意味ばかりを考えようとしていた。

私は、これまでの活動を通してグループでアドバイスしあうことや、対話を通して今こそ関係を築き上げるときなのだということに気がついた。B さんが言った言葉を通して、切り取られた「知識」を理解するのではなくBさんと対話するなかでBさんをさらに知ろうとしたこと、そうすることで、B さんの情報が少しずつ増え、その情報を自分自身の感情と比較した。その結果、共感したり、違いを感じたりすることになった。ここで獲得したBさんに対する情報は、切り取られたものではなく、私とBさんとの間に生まれたものである。そこで考え、自分の中に残ったものが私の知識になるのではないかと考える。知識とは、たんなる情報の集まりや形式ではなく生身の人間のやりとりで生まれる個人の生き方なのではなだろうか。

## 終わりに

### １．この活動の意味

私は、この授業の大きな意味は仮の考えではなく今まさに自分の思考を深めるという機会が与えられていることであると考える。そして、深めるだけではなくて深めたものを他者に投げかけその反応からまた自分を形成していくことができる時間を与えられた。実際、私は対話活動で、どうしたら自分の言いたいことが言えるのか、自分はなにが言いたいのか、相手はどのように思っているのかをずっと問い続けてきた。これまでのように、単なる情報を詰め込むだけの授業とは違い、これまで生きてきた自分の生い立ちのみが、自分を支える「教科書」だったのである。この授業で一貫して行われてきた自分の興味関心との関係を、過去、現在、未来を貫く視点で考えるというのは、個人の考えを持つための方法であると考える。そして、この方法のもと他者との対話の中で考えを構築してくことが本当は社会でも求められているのではないだろうか。教室という小さな社会と、自分が関わっている教室以外の社会を私が結ぶという体験をすることで、教室がなくなったときも、この授業で獲得した考え方や、方法をつかって私は自分の周りにいる人と関係を結んでいくことができると考える。

私は、この活動を通して固定的な知識はないことを学んだ。そのような知識を探し求めるより、「考える」ということをこれからもっとこまめにしていこうと思っている。これまで、これでいい

かなと思っていたことに足してもう一歩「なぜ？」と問うことを自分自身にも、周りにいる人にも行っていきたい。そうしながら私はこれからも人と関わり、自己を更新し前向きに生きていきたいと思う。自分を問うことから出発し、他者へ発進することで、自己と他者が結ばれる。その時にはやはりことばを使って繋がるのである。興味関心と自分の関係を明確にすることは、他者とつながる第一歩なのだと思う。

## ２．ことばの市民になるとは

私は、これまでの活動を振り返り、B さんと対話をし、グループのメンバーにコメントをもらったことで、私は今対話をしている B さんとの間に関係を築くことの重要性を学んだ。グループの中での対話でも、B さんとの対話でもたくさんの情報をやり取りした。今の私に残っているのは、その情報量ではなくそこから得たみんなへの理解である。なので、たくさんの情報が人と人とを結ぶわけではないと改めて実感する。情報から自分と比較したり相手を理解しようとするときに、ことばを使い結ばれるのである。

ことばの市民になるとは、一人一人が自分のことばを使って社会で生きるということえあると考える。ここで言う自分のことばとは、形式ではなく、その人が自分の言いたいことを表すために選び取った言葉である。なに語であっても、思考とことばがむすびついてないといけない。私のように、母語で日本語を流暢に話せるようにみえたとしてもそこに、自分と結びつけて考えるという過程がなければことばの市民とは言えないのである。自分の考えを確立するために、対話をし、対話のなかで自分を更新していく。そうであるならば、そもそもことばとは自分の気持ちを表すためにあったはずである。ことばがあるからそこに気持ちを加えるのではない。ことばを使っているだけでも、人と一緒にいるだけでも市民にはなれない。ことばの市民になるために私たちはことばを使うのではなく、人と関係を築くなかでことばが使用されそこで築く関係によってことばというコミュニティで生きる市民になるのであると考える。